

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2013 年 3 月

66号



〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5

JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com

http://keaf-japan.com

進出工場の賃金が大幅アップ

「家計助け」の退学・就職増える
インフレが心配・・・

金子 敦郎

途上国の経済成長とはこういうことなのだ。2月の現地訪問でそれを目のあたりにしました。KEAFが支援してきた貧しいプレイヴェン州プレアスダイ地方にカンボジアの経済発展の大波がいよいよ押し寄せてきて、村の人たちの生活が一変しようとしているのです。

新学年が始まって半年もたたないのに、プロモルプロム高の奨学生7人が退学してプノンペンなどの工場に働きに出たので、奨学金を別の生徒に振り替えることにしました。仕事に就いたり結婚したりで年に1～2人の変動はよくあったのですが、こんな大量差し替えははじめてです。マット校長によると、月給がこれまでの40～50ドルから一気に平均80ドルに急上昇し、残業手当も増えて100ドル、大企業では150ドルもの月収になるとのこと。(勉強より出稼ぎという意味で) 困ったことですねという、マット校長は家計を楽にしてやれるのだからいいことだと答えました。

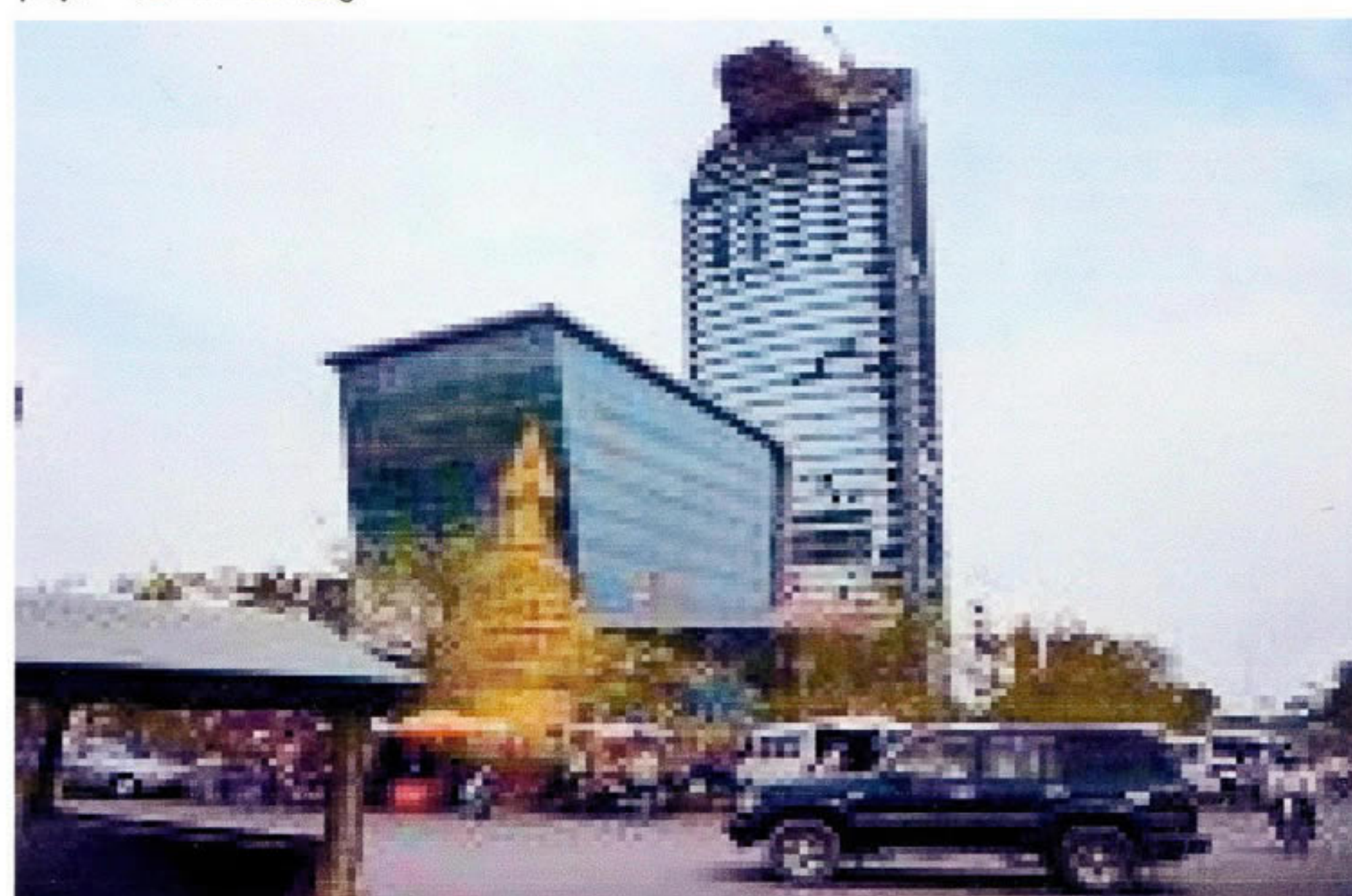
2年ほど前から中国やベトナムに代わってまだ賃金が安いカンボジアが、先進諸国の工場移転先として注目されるようになりました。そのカンボジアでも賃金上昇が始ったようです。この状況(インフレ)に合わせて、先生たちの月給も近く大幅に上がると嬉しそうでした。小学校は70ドルへ(現在50ドル)、中学校90ドル(同60)、高校120ドル(同70)で、高校の校長は150ドルになるそうです(いずれも概算)。

住民の大半は1～1.5ヘクタールのコメづくり農家で、年間のグロス収入が800ドル、モミ代、肥料代、水利ポンプ使用料、農薬代などを引いて200ドルほど残るというのがこれまででした。ところが今年は粗収入が1,000ドルに増えたものの経費の値上がりの方が大きく、害虫の発生もあって利益は100ドルにもならず、マイクロ・ファイナンスに頼る家も出ているとのこと。自身1ヘクタールの兼業農家でもあるポーン先生の話です。

郡都の町プレアスダイに電気が点いたのが3年前、相前後してマーケットが改築され、銀行の支店が2つ開店、

2年前にはベトナム南部とを結ぶ国道1号線から分かれ、同町を抜けてベトナムにつながる郡道が舗装されました。新しい食堂や商店が次々に開店して、町は一気に活気づきました。

道路がめっちゃくちゃで、バイクか自転車では行けなかったベトナム国境に向けてこの舗装道路を走ってみました。数キロごとにガソリンスタンドが建てられ、いくつかのスタンドは営業を始めていました。国境地帯にはなんとカジノまで建設中です。道路沿いのバンティチャクライ中学やプレイトープ小学校の先生たちに聞きました。バイク用のガソリンは税金込みの分だけ、村の売店や道路脇に並べて売っているビール瓶詰めガソリンより高いとのこと。



プノンペン市中心部に建設中の高層ビル

新規開店の商店やガソリンスタンドの経営者は地元の人たちではなく、外からの人やベトナム人だといいます(次頁の池内秀樹さんの5年ぶりのカンボジア訪問記を参照してください)。

国道1号線を東へ行くとスヴァイリエン州を通ってベトナムに入ります。経済的にはベトナムとカンボジアの間には大きな格差があり、この国境を通してベトナム製品が大量にカンボジアに輸出されてきます。アンコールワット・ツアーのベトナム人団体客を乗せた大型観光バスもひっきりなしに通過していきます。1号線をカンボジア・ベトナム交易の幹線とすれば、プレアスダイからベトナムに抜ける郡道はその支線として「発展」しつつあるということでしょうか。住民や子どもたちの生活が本当によくなるのなら嬉しいのですが。

気になる「変化」が進行中

前国王の葬儀で一時代の終わりを実感

池内 秀樹

タッコー高校などを訪問

5年ぶりのカンボジア訪問となった。十数回、カンボジアには来ているが、プレイヴェン州は通過したことはあっても現地をゆっくり観察するのはこれが初めてだ。夏の始まりという人もいるが、2月初旬の終わりは乾季の真っ最中、日中は30度以上だと思う。しかしトンレサップ川のさわやかな風が心地よい。プノンペン王宮の一角には、プカートローマイクというカンボジアの桜の、紅で縁取りされた白い花が咲いていた。

2月8日（金）プノンペンからざっと2時間、ネアクルンの渡船場でメコン川を渡り、国道1号線沿いのタッコー中高校を訪問。校長のチェア・ソティ夫人らに迎えられた。ことし国立大学へ進学するという KEAF 奨学生の男女生徒2人、パン・ソティナさん、ポ・サ・ソム君が同席した。2人ともちょっと離れたところにあるプレイトープ中学出身で、いわば越境入学のような形でタッコー高校で学ぶ。近所の親戚の家に寄宿し、通っているのである。ふたりは将来、地理の先生になりたいなどの希望を口にした。優秀な生徒さんとの好印象をもった。

中退者が8人も

この後、プラテアート中学、プレイトープ中学、コンポントウラバイ高校などを翌9日の2日間に訪れた。タッコー高校、プラテアート中学などでは、入学者がことし昨年比で減少しているという話だった。学校が増えたからではないか、との説明だったが、この現象については、しばらく注意深く見ていく必要があるように感じた。

また、プロモルプロム高校で聞いた話だが、同校では、この1年で8人の KEAF 奨学生が中退してしまい、その理由は結婚した1人を除き、ほとんどが縫製工場などへ就職してしまったからだ、とムット・ポーン校長。中退者の多くは地元の工場で働いているとのことだが、働き

口を求めてプノンペンへ出て行くと月額100ドルぐらいの稼ぎになるそうだ。プノンペンに行ってしまうと消息を抑えておくことはむずかしい。毎年、何人かは中退していくとのことだが、この点も気がかりである。入学者の減少と、やや多いなと感じた中退者の数、この二つに通底する社会的変化があるのかどうか、一度の観察では、無論、分からない。

カジノまで登場

カンボジアの復興に伴って、プレイヴェン州やベトナム国境のスヴァイリエン州では、ベトナム資本の進出が顕著で、国道1号線はすでに整備され、そのバイパス的な役割を果たしているタッコー高校の脇道も舗装され、交通量が多い。それに引き換え、プレイトープ小学校への道は、でこぼこが激しく、バイクを調達できなければ、われわれは行けない。極端な格差が目に見える形で隣り合わせになっているのが現状だ。

舗装された道路沿いには、こんなにつくっていいのかと思うほどにガソリンスタンドが新設されるか建設中だった。ビール瓶にガソリンを詰めて木箱程度の台に載せて売っているささやかな露天の店ももちろんまだある。また用途が不明の建造物を道路沿い、2カ所ほどで見かけた。通訳のソ・コンティンさんによると、ベトナムがつくったカジノで、とりあえずベトナム人専用であり、カンボジア人の利用はカンボジア政府が禁止しているという。ネアクルンの渡船場の近くでは、この大河に架ける橋の基礎部分の建設工事が進行中だった。ベトナムと結ぶ国道1号線は、このように開発が急速に進行中であり、国境を接するスヴァイリエン、その隣のプレイヴェンの両州はその影響をまともに受けつつあり、確実に変化しつつある。おりしも、滞在中、シアヌーク国王の盛大な葬儀がプノンペンで行われた。前国王の葬儀はカンボジアの一時代の終わりを確実に画すものとの印象を強くさせるものだった。

注；筆者の池内秀樹さんは共同通信で長く一緒に仕事をした仲間です（金子）

折り紙、綾とり、お手玉

子どもたちの笑い声が響き渡りました

瀧川 真理子

(ユーカー福祉会上野原さくら保育園)

昨年9月にカンボジアの「子どもの遊び教室」に参加することが決まった時、正直とても戸惑いました。大勢の子どもたちに何かを教えるという経験だけでなく、外国に行くということ自体が初めてだった私は、カンボジアという国がどういうところなのか全く想像が付きません。不安を抱えたまま、カンボジアに入国しました。

入国当日は野田首相がカンボジアを訪問中で、交通整理が行われていて交通量は多くて混雑していました。バイクの3人乗りや飲食店の床にゴミが散らばっていたり、まわりにハエが飛んでいたりする中を普通に生活している人々の姿に「テレビや新聞でみてきた国に本当に来てしまったんだ」とちょっとショックを隠すことが出来ませんでした。

目の前の光景に戸惑ったまま、教材の買い出し等の準備を済ませ、補助教材を届けるためにタッコー中学校を訪問しました。ここは教材を届けるだけの予定でしたが、急きょ子どもたちに折り紙を教えることになりました。教室には70名ほどの中学生が待っていました。心の準備が出来ぬまま、日本では定番の鶴を折り始めました。中学生といっても慣れない折り紙に苦戦する子どもたちの姿に「これは失敗だったかな。難しいみたい」と反省した反面、それでも諦めずに鶴を完成させようとする子どもたちを見て嬉しく思いました。

翌日から本格的に中学校訪問がはじまり、最初の訪問先、プロモルプロム中学校では中学2年生の教室にお邪魔しました。これから一体何をするのだろうと不思議そうに私を見つめる子どもたちがいました。

折り紙で船や箱を作ると、興味津々で子どもたちも作り始めました。器用に作る子もいれば、上手く出来ず友だちに教えてもらう子も。何度も折り直し、少しくしゃくしゃになった舟など完成した作品を嬉しそうに見つめる姿、作り方を忘れないようにもう1回作ろうと自分のノートをちぎる姿。楽しんでもらえているのだと強く印象に残りました。折り紙で一番盛り上がったのは風船で、息を吹きかけ風船が膨らむ様子に声を出して笑う姿は、他のプレイトープ、プラティアート、コンポントゥラバイ、バンティチャクライの各中学校でも同様でした。

あや(綾)とりでは、指抜きや腕抜きなどの手品に近い遊びがほうき(箒)のように形をイメージするものよ

り取り組みやすいようで人気がありました。ひも(紐)の引っ越しという指から指へひもを移動させる遊びで、何人か前に出て来てもらい、誰が一番速く出来るか競争することになると、積極的に手を挙げて参加してくれました。恥ずかしがっている子も「やってみて」と声をかけると、照れながら出て来てくれました。前に出た子にクラスの子が拍手や歓声を上げ、大盛り上がりでした。

その後のお手玉遊びで、前に出てと声をかけると、「待っていました!」とばかりに、友だちを誘いながら前に出て来て挑戦する子が増えていきました。それが他のクラスから見に来ていた子へも広がり、最後はクラスに関係なくみんな一緒に楽しむ姿が見られました。

午後の授業が始まるまでの休み時間に、教室に残っていた子に「もう一枚折り紙が欲しい」と声をかけられたことがきっかけで、みんなで折り紙をして遊ぶことになりました。初めは3人ほどだった人数が、1人また1人と増え、気が付けば10人以上の子どもたちに囲まれていました。外では小学生も混ざってなわとび大会が始まり、大勢の子どもたちの笑い声が響き渡りました。

出稼ぎに行くために学校を辞めなくてはならない子



(プロモルプロム中学校で折り紙を教える筆者)

もいるという現状がある中、学校に来て勉強をしている子どもたちの、言葉が通じなくても、よく見てわからない時は身振り手振りを使って積極的に質問し、初めて触れる日本の遊びを全力で楽しもうとする純粋な気持ちは、電子ゲームなどたくさんの物に囲まれている日本の子どもたちよりも豊かでうらやましく感じます。

廊下をすれ違った子どもたちが、覚えてばかりの日本語で「さようなら」と挨拶をし、笑顔で帰って行きました。日本の伝承あそびをした経験が子どもたちにとって楽しかった思い出として少しでも残ってくれれば嬉しいです。

「子ども遊び教室」を通して、カンボジアの歴史を知り、現在の様子を見て感じたこと、学んだことで広がった世界観を、日々の保育で生かせたらと思います。

ありがとうございました

(2012年11月21日～2013年1月31日)

年会費、寄付金、奨学金をお振り込み下さった方々に厚くお礼を申し上げます（敬称略させていただきます）

(神奈川) (埼玉) (神奈川) (神奈川) (神奈川)
(東京) (東京) (福島) (神奈川) (東京)
(東京) (京都) (東京) (神奈川) (東京)
(熊本) (東京) (東京) (神奈川) (千葉) (宮崎)
(神奈川) (千葉) (神奈川) (東京) (埼玉)
(群馬) (東京) (福島) (東京) (東京)
(東京) (東京) (大阪) (千葉) (東京) (埼玉)
(東京) (千葉) (東京) (富山) (東京)
(東京) (東京)

※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています

※写真つき奨学生紹介の4、5、6、7頁は個人情報保護のため省略

∞ ∞

仏教の国カンボジア

《事務局から》

全国でお寺再建が進んでいます

カンボジアは仏教を国教にしています。国民の95%が小乗仏教（最近は南方仏教と呼ばれることが多い）を信じる仏教徒です。フランス仕込みのモダンボーイ然としていた故シアヌーク国王ももちろん仏教徒でした。農村の村に行っても必ずお寺があり、フランス植民地時代もお寺は子供たちの初等教育の場になっていました。

ポル・ポト時代にはお寺は学校と同様に抹殺の対象にされ、ほとんどが破壊されました。内戦が終るとどここの村でも住民の喜捨によってお寺が再建され、あるいは再建が進んでいます。村を出て成功した人はまず郷里のお寺再建にお金を送ってくるそうです。

KEAF が支援している小学校や中学校と並んでお寺が建っているところが多く、お坊さんが学校の先生と一緒に子どもたちの教育を支えています。写真は前国王の葬儀に全国から集まったお坊さんたち（ウナローム寺院で）。



円安は困ります

KEAF は輸外型

安倍政権の掛け声で市場は円高から円安へと動いています。輸出型か内需型かで悲喜交々ですが、KEAFはささやかながら海外でお金を使うのが仕事ですから円安で困る組です。

13 年度の高校生奨学生は約 100 人です。給付金は 1 人年間 50 ドルですから計、5,000 ドル。円相場は昨年は平均 1 ドル 85 円（含手数料込）でしたから総額 425,000 円でした。この 1 年を 1 ドル 95 円とみると、475,000 円となり 50,000 円増えます。予算額を増やせないとなれば奨学生を 10～11 人減らさなければなりません。航空運賃、ホテル代、教科書・教材などの購入にも影響が及んでくると、大困りになります。

カンボジアの通貨はリエル。政府が管理してこの10年あまり1ドル=4,000リエル前後に事実上、固定化されています。国内では外国人旅行者のみならず、農村に行ってもドルがそのまま通用しています。

そういう特殊な経済なので、日本の円安がカンボジア現地の KEAF 活動の経費にどんな影響がでるのかは、よく分かりません。

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan)

162-8433 東京都新宿区市谷本村町 10-5

JICA 地球ひろば 気付

info@keaf-japan.com

<http://keaf-japan.com>

03-3418-7003 (金子 敦郎)